

現場連携による実習評価ルーブリックの開発 (Ⅲ) ～実習のためのアセスメント・システムの構築に向けて～

尾崎 司^{†1}

(令和1年11月28日査読受理日)

Development of an internship assessment rubric in cooperation with a nursery center (Ⅲ)

Ozaki, Tsukasa^{†1}

(Accepted for publication 28 November, 2019)

要約

本研究では、現在使用しているルーブリックと実習巡回報告書をICT化した「実習のためのアセスメント・システム」を開発し、その構築に向けてのロジック・モデルを提示した。このシステムにより、学生がルーブリックを活用して自己評価をしながら実習を改善することができ、学生の状況に対して教員が指導やケアをおこなうことができるだけでなく、このデータをWeb入力することによって、①教科教育、②研究、③実習指導への活用に役立てることができる。また、教員組織内での情報共有とフィードバックをおこなうことが可能となり、学外施設との連携で得られたデータを教員組織内で活用することは、教育の内部質保証につながるFD活動となりえる。

Abstract

Worksheets for learning facilitation that use an internship assessment rubric generally function as tools for reflection, facilitate assessment for learning, and indicate the next steps. However, an internship assessment rubric may become more efficient through the use of information and communication technologies (ICTs). This paper proposes the construction of an assessment system for a childcare internship that was built using Google forms in order to facilitate learning while making use of an internship assessment rubric. We demonstrated a Logic model for the construction of an assessment system, a tool to improve programs, by exchanging opinions of people concerned with the programs. This system provides new insights and outcomes for teachers concerned with childcare internships. In sharing sufficient data inputted by students, we can utilize information for our classes, future studies, and consultation.

キーワード：保育実習、ルーブリック、FD

Key words: childcare internship, rubric, faculty development

1. 開発の背景

2017年度に「保育現場との連携による実習評価ルーブリックの開発」をテーマに、大学が保育現場や学生と協働して保育実習のルーブリックを開発した。

このルーブリックは、本学で使用している5段階評価票(A～E)をめぐる「二重のばらつき」を解決することから始まっている。すなわち、評価項目の捉え方や基準が、実習施設ごとに異なり、評価者によって評価基準も異なる。さらに、同じ施設内であっても、指導者の数だけ評価基準があり、それを統合・総合する評価は、実際の評価では問題となっていた。

研究成果としては、大学、保育現場、学生の三者が議論した内容をルーブリックの評価観点に反映することができ、実際に使用可能なモデルを提示することができた(尾崎, 2018a および 2018b)。

さらに、継続研究として、開発したルーブリックを、中

間評価や事後学習へ活用(尾崎, 2019a および 2019b)し、形成的評価として学習を促進する実用化の可能性を探った。

これまで高等教育でのルーブリック活用は数多く報告されているが、現場と連携した実習領域での導入と適用は先行事例がほとんど見受けられなかった。尾崎(2019a, 2019b)では、ルーブリックを実習領域に適用することで、前述の問題解決に寄与することが確認できた。しかし、この開発したルーブリック(図1)を元に、実習中や実習事後の学習に活用する中で、次の2つの観点からICT化の必要性を感じた。

(1) 実習における学習支援

約2週間の実習における中間評価(約1週間目)と最終評価(約2週間目)、実習終了後の事後学習にルーブリックをベースにしたワークシート(用紙)を使用していたが、これがデータとして活用できれば、実習中に学習を支援するための指導につながり、事後学習では学習のデータ活用および分析が可能となるのではないかと。

^{†1} 東京家政大学短期大学部保育科

保育実習 I で経験してほしい内容（評価票）				
[実習生]		（クラス 組 学籍番号）		[欠勤・・・回、遅刻・・・回、日誌未提出・・・回]
評価観点	すばらしい	がんばった	次はクリアだね	
コミュニケーション	あいさつ・所作	進んであいさつができ、丁寧な言葉づかいや礼儀正しい振る舞いを行うことができる。	進んであいさつはできるが、丁寧な言葉づかいや礼儀正しい振る舞いを行うことができない。	進んであいさつができず、丁寧な言葉づかいや礼儀正しい振る舞いを行うことができない。
	情報の共有（報告）	保育者に伝えなければならないことを適切なタイミングで報告できる。	時々、報告を忘れることもあるが、保育者に伝えなければならないことを報告できる。	保育者に伝えなければならないことを報告できない。
	情報の共有（相談）	保育者と相談しながら、すすめることができる。	適切なタイミングで相談できないこともあるが、おおむね相談してすすめることができる。	自分の判断のみでおこない、保育者に相談できない。
	実習指導を受ける態度	言われたことや助言を素直に受け止め、実行することができる。	言われたことや助言を素直に受け止めることはできるが、なかなか実行することができない。	言われたことや助言を素直に受け止めることができない。
保育の専門性	発達の理解	子どもの姿を記録し、事前学習した発達の知識に関連づけることができる。	発達過程を意識しながら、子どもの姿を記録することができる。	子どもの姿を行動の羅列として記録するが、発達過程と関連づけることができない。
	援助の理解	保育者の言動にふれ、姿勢やかかわり方、考え方を捉え、実践に結びつけることができる。	保育者の言動にふれ、姿勢やかかわり方、考え方を捉えることができる。	保育者の言動にふれても、その姿勢やかかわり方、考え方に興味を持つことができない。
	子育て支援の理解	子育て支援の実例を聞き、事前学習と結びつけて、その重要性を理解することができる。	子育て支援の実例を聞き、事前学習と結びつけることができる。	子育て支援の実例を聞いても、関心を持つことができない。
	質問による理解の促進	子どもの気持ちやかかわり方(意図)、保育に関すること等を質問し、実践に結びつけることができる。	子どもの気持ちやかかわり方(意図)、保育に関すること等を質問することができる。	子どもの気持ちやかかわり方(意図)、保育に関すること等を質問することができない。
子どもへの関心	子どもへの関心	他者に伝えたいような子どもの姿に出会い、日誌などに記録し、保育の魅力を発見することができる。	他者に伝えたいような子どもの姿に出会い、日誌などに記録することができる。	他者に伝えたいような子どもの姿を日々の保育の中に発見できない。
	子どもの世界の尊重	子どもの目線に立ち、子どもが心を動かし考え楽しむ過程を尊重し見守ることができ、日誌などに記録することができる。	子どもの目線に立ち、子どもが心を動かし考え楽しむ過程を尊重し見守ることができる。	子どもの目線に立ち、子どもが心を動かし考え楽しむ過程に関心を持つことができない。
	生活の連続性への理解	日々の出来事や生活と子どもの姿とのつながりに関心を持ち、関連づけて考えることができる。	日々の出来事や生活と子どもの姿がつながっていることに関心を持つことができる。	日々の出来事や生活と子どもの姿がつながっていることに関心を持つことができない。
子どもとの関わり	遊びの理解	子どもと一緒に遊ぶことはできるが、子どもが感じる遊びの魅力を理解することができる。	子どもと一緒に遊ぶことはできるが、子どもが感じる遊びの魅力を伝えることができない。	子どもと一緒に遊ぶことができず、子どもが感じる遊びの魅力を伝えることもできない。
	関わる準備と実践	子どもと関わるために必要なことを事前に考え準備して、丁寧に関わるることができる。	子どもと関わるために必要なことを事前に考え準備できているが、丁寧に関わることができない。	子どもと関わるために必要なことを事前に考え準備できず、丁寧に関わることができない。
	関わる魅力の発見	子どもとの関わりを通して気づき、発見できたことから、自分の考えをまとめることができる。	子どもとの関わりを通して、気づきや発見をすることはできるが、そこから自分の考えをまとめることができない。	子どもとの関わりを通して、気づきや発見をすることができない。
[保育所]		[実習期間] 年 月 日～ 年 月 日（ 日間）		[実習担当者] 印

図 1. 開発したルーブリック

(2) 実習における学生のケア

実習の中間時期（通常 4 日目～ 8 日目）には、教員が実習園を訪問し、巡回指導をおこなう。巡回教員はその時の学生の学習状況や困り感、指導の様子を実習巡回報告書（用紙）に記入し提出して報告していたが、報告書が提出された時点では問題に対処できないこともある。ICT によりデータとして実習生の状況把握とフィードバックが可能となれば、実習生のケアに役立つのではないか。

そこで、こうした実習に関わる実務的な課題を解決するために、ルーブリック（評価票）や巡回報告書を Google フォームで作成し、Web 入力による実習アセスメント・システムを構築したいと考えた。

本稿^{注1}では、次のような構成をおこなった。2 章では、Google フォームを活用してシステムを開発することによって、この課題にアプローチする。3 章では、システム構築に必要な観点を抽出するために、これまでの実習におけるルーブリック研究の課題を整理する。4 章では、形成的評価の観点からルーブリックを検討し、「学習のためのアセスメント」の考え方を援用して、「実習のためのアセスメント」を提案する。5 章では、これまでに開発したルーブリックをもとに、学習面のみならず実習生のケア（学習環境のサポート）の双方の側面から、ICT を活用したモデルを

提示する。6 章では、政策提言などで用いられるロジック・モデルを援用し、5 章で提案したモデルの実行可能性を示す。

2. 課題解決へのアプローチ

Google フォームを活用した「実習のためのアセスメント・システム」を構築し、課題解決にアプローチする。このシステムでは、実習における学生のケアと学習支援を Google フォームによって活用可能なデータとして取り扱うことで、教員組織内での情報共有とフィードバックをおこなうことが可能となる。

なお、本稿ではデータは使用しなかったが、データを収集する際には、事前説明および Google フォーム内で研究・教育目的に使用することを説明し、承諾する選択肢を提示することにより、個人情報保護に配慮している。

3. 実習ルーブリック研究の課題

保育実習におけるルーブリックの先行研究は、三木(2018)が散見されると述べている通り、まだ数少ない。そして、保育実習領域にルーブリックを適用し導入する際には、次に示すような 3 つの課題がある。

3.1 モデルの実行可能性

一つ目の課題は、作成されたモデルの実行可能性があげられる。尾崎（2018a, 2018b）は、養成校と保育現場、そして学生の三者協働でルーブリックを作成したことにふれ、「評価観点を三者が共有し、互いに認識を変容させることができたという点」で画期的な試みであったと述べている。実際に、三者の協働作業によって認識のズレが確認でき、被評価者である学生の意見や保育現場の評価に対する思いが、これまで反映されていなかったことが分かった。そして、養成校（教員・研究者）の視点のみで作成したルーブリックは、尾崎（2017）で検討した仮ルーブリック（たたき台）のように、抽象的で解釈の幅が広いものになる傾向があり、従来の形式を焼き直しただけのものになる恐れがあると指摘している。養成校側はこれまで学習した知識を実習に活かそうとする考えが先行してしまうため、どうしても学習内容の評価項目を多く盛り込む傾向があるが、他の教科で評価できる項目は実習の評価項目から外すことも必要かもしれない。例えば、キーワード抽出による研究によって評価項目を定める場合、「抽象的で解釈の幅が広いもの」や「学習内容を網羅した多数の項目」が設定され、保育現場や実習生にとって実行が難しいモデルとなる可能性が高い。

3.2 評価と実習指導の分離

2点目は、前述の課題と関連するが、現場での実習評価と事後の自己評価が切り離されており、連動させて振り返ることができるような、実務的な仕組みができていないことにある。先行研究から語彙抽出した自己評価項目に対応した事後学習の自己評価ツールとしてのルーブリック（例えば三木 2018）や、その授業研究（例えば平澤 2017, 加藤ほか 2017, 尾崎 2019a）は提示されているが、実習中のルーブリック（評価と指導）の研究は、中島ほか（2014）と尾崎（2019b）以外はほとんど見受けられない。形成的評価としての、ルーブリックの特性を考慮すると、評価とそのフィードバックを活用し連動した仕組み（評価と指導の一体化）が考えられておらず、結局、総括的評価として活用されているのが現状である。

3.3 組織としてのFD活動

3点目は、これまで個人レベルの研究や取り組みとしての成果は示されているものの、ルーブリックが教員組織内で活用される取り組みには至っていないことがあげられる。実習を核とした保育者養成を考える上では、アクティブ・ラーニングやパフォーマンス評価を取り入れることだけにとどまらず、教員組織が一丸となって学生を育てる体制や仕組みづくりが必要である。また、保育者養成課程において、実習は学内学習（授業）を学外に開き、実習施設からの学外評価を点検する機会と捉えることができるので、

実習評価に関するデータを教員組織内で活用することは、教育の内部質保証につながるFD活動となりえる。

以上のように、保育実習領域のルーブリック研究には実行面においてまだ課題も多く、学内だけではなく学外での活動という特性から学内と学外の学習をいかにして連動させるか、またそれを実習担当教員だけでなく教員組織内でどのように情報共有していくかが重要な課題となっている。そのためにも、保育現場や学生が使用しやすい仕組みづくりが必要不可欠であると言える。

4. 実習のためのアセスメント

ところで、ルーブリックで「評価」するという場合、保育現場からは「うちの園は子どもを何ができる・できないで評価したりはしない。だから、実習生も何ができる・できないで評価することはできない」という反応が少なからずある。この発言の背景には、評価は能力という物差しで序列や優劣をつけるものと捉えられており、一度つけられた評価は、その子にずっと付与されるという固定的な評価観が見受けられる。

一般に評価と言う時、「アセスメント」や「エバリュエーション」という言葉が使われる。アセスメントは事中の査定、エバリュエーションは事後もしくは最終的な評価・意味付けに使用されている。教育評価事典によれば、「アメリカにおいて一般的に、エバリュエーション（evaluation）とアセスメント（assessment）は同義（教育評価の意）で用いられる。しかし、アセスメントが実態把握を意味するのに対し、エバリュエーションは実態把握に基づいて下される価値判断を指す」とある。また、同事典には、「アセスメントを評価に必要なデータを収集する行為」、「エバリュエーションをそれらのデータをもとに下される価値判断」とも記載されており、「エバリュエーション」は「把握された実態を教育目標に照らし合わせて妥当で十分なものかどうかを問い直す行為」という意味合いも強い。したがって、こうしたことを考慮すれば、形成的評価（formative assessment:FA あるいは formative evaluation:FE）と言われるルーブリックには、価値判断を伴わず、実態把握や評価に必要なデータを収集するという意味で、アセスメントという表現の方が適切であると言える。

安藤（2004）は、FAが「学習後の評価のニュアンスが強くなるので、むしろ学習のためのアセスメント（AfL）と表現するほうが適切である」という主張や、FAよりも「AfLのほうが教師は指導に立ち戻ることができ、学習者は学習改善に関わるので好ましい」という主張、「フィードバックが学習者の学習を改善し、学習意欲を高めるものであるにもかかわらず、フィードバックを矯正と捉えており、その点が学びの展開の自由度も大きいAfLとの大きな違いであ

る」という主張などを引用しながら、形成的アセスメント（FA：formative assesment）から学習のためのアセスメント（Afl：assessment for learning）への移行の過程について言及している。そして、イギリスの政策提言グループであるアセスメント改革集団（ARG）がAflを「学習者と教師が(a)学習者が今学んでいる場所と(b)次に進む必要のある場所と(c)そこへ行く一番良い方法を決定する際に使う証拠を追求し、解釈する過程である」と定義していると紹介している。安藤は、この後、漸次的な責任移譲のモデルやピア・フィードバックを継続的に使い続ける授業実践を取り上げているのだが、これまで見てきたようにAflには「能動的な学習者による構成主義的な学びを尊重する学習観」が強く反映しており、ルーブリックを考える上で重要な観点であると言える。

以上のことを検討すると、実習生がより良い保育を習得するために、実態把握をおこない、様々な人と対話しながらフィードバックを繰り返すルーブリックには、アセスメントという表現の方が適切であることが分かる。したがって、保育実習におけるルーブリック評価は、前述したAflの定義に則って言えば、学習者を実習生に、教師を現場実習指導者もしくは実習指導教員へ置き換えて何ら差し支えない。むしろ、総括的評価としての成績評価が主ではなく学習を促進することを第一義とするならば、「実習のためのアセスメント」と呼んだ方がその実態をより明確に表現するものとなるだろう。このように、「評価」という言葉では学習支援のための実態把握というニュアンスを表現することが難しく、フィードバックにより更新していく可変的なものとして捉える評価観への変更が求められる。

以下、本稿では、こうした理由から「実習のためのアセスメント」という言葉を使用することにする。

5. 実習のためのアセスメント・システムの提案

5.1 事後学習での ICT 活用

尾崎（2019a）では、ルーブリックのシート（用紙）を活用していたが、2019年の事後学習からはGoogle フォーム（図2）を活用した。ルーブリックを自己評価し、なぜその評価基準に丸をつけたのかの根拠となるエピソードを、シート（用紙）に記入し、さらにそれをGoogle フォームにも入力し事前課題として提出するように指示した。授業では、記入したシート（用紙）を匿名のまま教室内でランダムに配付し相互評価を3回おこなった。その後、相互評価をおこなったシートを本人へ戻し、事前に入力された事前課題を元に教員が講義した。授業内での相互評価や講義を元に、再度実習の振り返りをおこない、シート（用紙）に記入し、さらにそれをGoogle フォームに入力してから事後課題として提出するように指示した。Google フォームへ入力することで、実習生のエピソード・データが収集で

事後学習シート 1

配布したシートにあなたが記入したことをそのまま期限までに入力してください。問い合わせは、ozaki@tokyo-kaset.ac.jp までお願いします。

学籍番号

記述式テキスト（短文回答）

名前

記述式テキスト（短文回答）

保育の専門性

評価観点	すばらしい(1)	がんばった(2)	次はクリアだね(3)
発達理解	子どもの姿を記録し、事前学習した発達の知識に関連づけることができる。	発達過程を意識しながら、子どもの姿を記録することができる。	子どもの姿を行動の羅列として記録するが、発達過程と関連づけることができない。
援助理解	保育者の意図にふれ、姿勢やかかわり方、考え方を捉え、実践に結びつけることができる。	保育者の意図にふれ、姿勢やかかわり方、考え方を捉えることができる。	保育者の意図にふれても、その意図やかかわり方、考え方に関心を持つことができない。
子育て支援理解	子育て支援の実例を聞き、事前学習と結びつけて、その重要性を理解することができる。	子育て支援の実例を聞き、事前学習と結びつけることができる。	子育て支援の実例を聞いても、関心を持つことができない。

実習を振り返り、自分の状況に当てはまるものをチェックしてください。

	すばらしい	がんばった	次はクリアだね
発達理解	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
援助理解	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
子育て支援理解	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

【発達理解】について、そこにチェックした根拠をエピソードとして記入してください。

記述式テキスト（長文回答）

【援助理解】について、そこにチェックした根拠をエピソードとして記入してください。

記述式テキスト（長文回答）

【子育て支援理解】について、そこにチェックした根拠をエピソードとして記入してください。

記述式テキスト（長文回答）

個人情報は厳重に保護し、授業の改善・向上の目的にのみ、上記の内容を研究や授業で活用します。また、あなたの回答によって不利益を被ることはありません。これを承諾いただけますか？

☐ 承諾します

☐ 承諾できません

図2. ルーブリックのGoogle フォーム

き、授業や実習指導に活用することによって、事後学習の学びを可視化することができた（尾崎，2019c）。

5.2 実習巡回報告書での ICT 活用

2019年6月から、これまでの実習巡回報告書（用紙）を廃止しGoogle フォーム（図3）への入力に変更した。変更することにより、次のような利点が確認できた。

- ・教職員の事務的な負担を軽減できる
- ・毎日チェックできるので、問題へ対処しやすい
- ・エクセル形式で書き出しが可能なので、教員組織内での情報共有ができ、実習指導教員やクラス担任、各教科目の授業担当などが学生の状況を把握するのに役立つ

実習巡回シート（教員用）

実習が終了する毎に、このシートに入力してください。実習生1名につき、このシート1枚です。このデータは、交通費申請や巡回報告書の作成に使用しますので、必ず送信してください。

巡回教員名

Your answer

所属

Choose

職名

Your answer

実習訪問先（保育園／施設）

Your answer

健康状態

Choose

5 points

日誌提出

Choose

5 points

指導案提出

Choose

5 points

教員がとらえた実習生の学びの様子をお聞かせください

Your answer

実習先から聞いた実習の様子をお聞かせください

Your answer

実習生との対話内容・コメント・指導などをお聞かせください

図3. 実習巡回報告書の Google フォーム

5.3 研究データ収集への ICT 活用

Google フォームによるシートや実習巡回報告書のデー

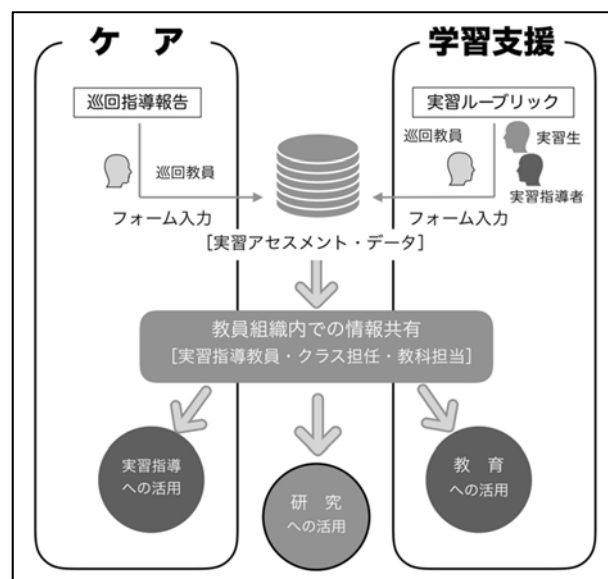


図4. 実習のためのアセスメント・システム

タは、文字データとして収集されるため、定性的研究としても分析が可能であり、学生や学習の特徴・傾向性などを把握することが可能となる（尾崎，2019c）。

5.4 実習のためのアセスメント・システム

以上のように、実習巡回報告書と開発したルーブリックをICT化し、ケアと学習支援の双方から実習をサポートし、より良い実習の学びが可能となるアセスメントとフィードバックに取り組めるように、「実習のためのアセスメント・システム」（図4）としてまとめた。

この「実習のためのアセスメント・システム」により、データをできるだけ早く収集し、学生をケアと学習支援の両側面から支援することが期待できる。また、エクセルなどに書き出すことで、教員組織内で情報共有することができ、①実習指導への活用、②研究への活用、③教育への活用が可能となるのではないかと考えられる。すなわち、実習における教育活動の実態をアセスメント・データとして適切に収集・蓄積し、分析・活用することが可能となる。

学生が学外にいても、スマートフォンなどのタブレット端末やPCなど様々なデバイスから入力できるので、この仕組みは学外実習だけではなく、例えばサービ

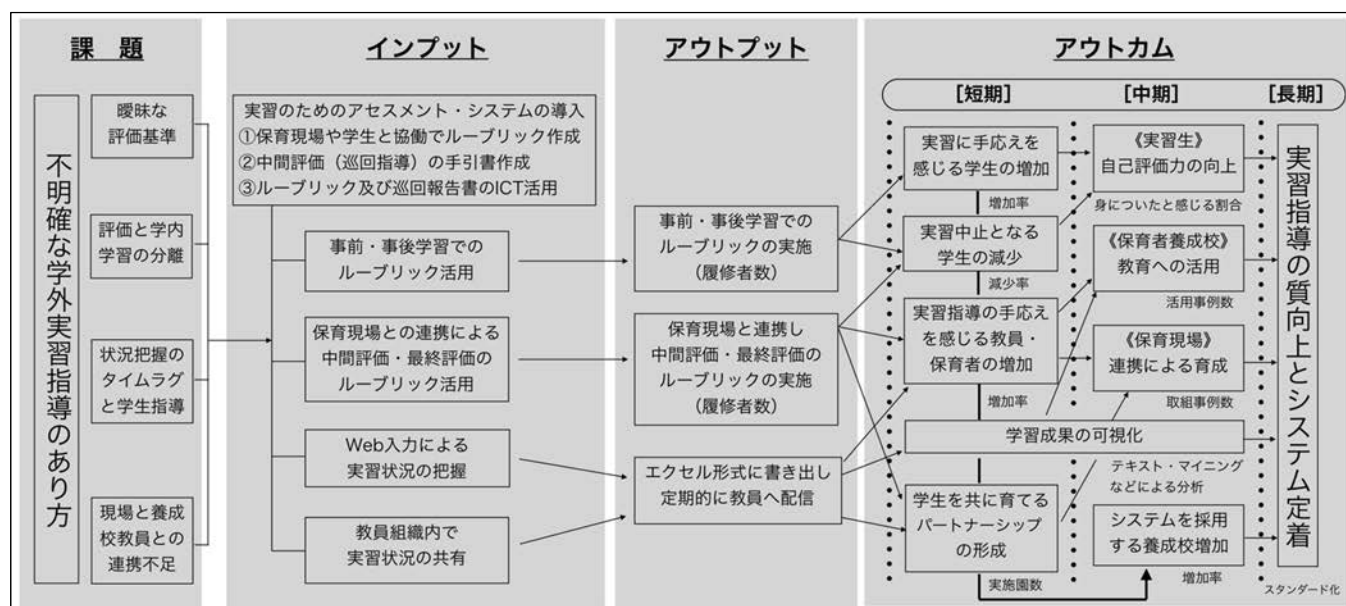


図5. システム構築に向けてのロジック・モデル

6. 提案の実行可能性～目標達成までのロジック・モデル

最後に、このシステムの構築に向けて、ロジック・モデル^{注1}を用いて、提案の実行可能性を示したい。

ロジックモデルは、一般的にはある施策や事業がその目的を達成するに至るまでの、インプット（投入）もしくはアクティビティ（活動）、アウトプット（結果）、アウトカム（成果）といった因果関係を論理的に示したものを指す。そして、そのプロセスにおいて、ストラクチャー指標、プロセス指標、アウトカム指標という3つの具体的な指標を想定する。ロジック・モデルを用いることによって、施策や事業をすすめていく上で、問題点の発見やインパクト（影響）の議論がしやすくなり、説明や共有、企画立案の際に役立つと考えられている。もともとは、米国のプログラム評価論のなかで発展してきたと言われているが、近年、政策提言や政策立案だけでなく、マネジメントの領域でも用いられるようになってきた。本稿では、実習のためのアセスメント・システムを構築するにあたって、数値的指標は記載していないが、図5のようにロジック・モデルを作成した。前章では、実習のためのアセスメント・システムを図4として提示したが、さらにこれを時系列の展開に置き換えて表現すると、図5のようになる。

このシステムを導入することによって、図5に示したようなアウトプットが生じる。そのアウトプットから、アウトカムが想定される。短期的アウトカムでは、形成的評価を意識してルーブリックを活用することで、実習に手応えを感じる学生が増加し、実習中止となる学生の減少が期待できる。また、実習指導の手応えを感じる教員・保育者が増加し、学生を共に育てるパートナーシップの形成が可能

となるだろう。Web入力したデータは、エクセル形式に書き出せるので、それを文字データとして分析することが可能となり、学習成果の可視化ができる。中期的アウトカムでは、実習生は自己評価力が向上し、保育者養成校では教育力が向上すると考えられる。保育現場とは、連携による育成が生まれ、このシステムが強化される。さらに、こうした成果が認知されることに伴い、このシステムを採用する養成校の増加が期待できる。これらのアウトカムが最終的には、実習指導の質向上とシステム定着という長期的アウトカムをもたらす。実習評価票による評価や実習指導のあり方・評価観に変化が生じ、それがスタンダード化することにつながる。

以上のように、ロジック・モデルにより、このシステムの構築に向けての道筋を示すことができた。

今後の課題と展望

2019年7月下旬から保育実習において「実習のためのアセスメント・システム」の試行を始めた。

現在、試行する中で、中間評価での保育現場や巡回教員に負担をかけないようなルーブリックの運用を検討し、実行可能性を高めている。保育現場との連携を深め、中間評価・最終評価の実施を確立していきたい。

ICTを活用することで、中間評価（保育実習Ⅰ）・事後学習（保育実習Ⅰ）・中間評価（保育実習Ⅱ）・事後学習（保育実習Ⅱ）のデータを分析し、実習の学びの軌跡を可視化することができる。今後は、実習を改善するためのデータが収集できるので、これを分析し実習の学びを可視化し、「実習のためのアセスメント・システム」の点検・改善をおこなっていきたい。

また、中期的アウトカムに示したように、システムを採用する養成校が増加すれば、養成校間の連携によるデータの共有と可視化が可能となり、実習段階にどのような学習支援が必要かをある程度、特定できるのではないだろうか。今後、大学間の共同研究などを通して、明らかにしていきたい。

【注】

1. 本稿は、公益財団法人私立大学情報教育協会主催「2019 年度私情協 教育イノベーション大会」での発表内容を元に、大幅に加筆・修正をした。
2. ロジック・モデルに関しては、例えば、「ロジック・モデルについての論点の整理」（大西・日置，2016）を参照した。

【引用・参考文献】

- 1) 安藤輝次,「ルーブリックの学習促進機能」,関西大学「文学論集」第 64 巻 3 号,pp.1-25 (2014)
- 2) 大西淳也・日置瞬,「ロジック・モデルについての論点の整理」,PRI Discussion Paper Series (No.16A-08: 通巻 297 号),財務総合政策研究所 (2016)
- 3) 尾崎司・中村教子,「現場連携による実習評価ルーブリックの開発 (Ⅰ) ～保育所実習のルーブリック作成に関する予備的考察」,東京家政大学研究紀要,第 57 集 (1), pp.31-41 (2017)
- 4) 尾崎司,「保育所現場との連携による実習評価ルーブリックの開発」,教育改革推進 (学長裁量) 経費予算成果報告書 (平成 29 年度),東京家政大学・東京家政大学短期大学部 学修・教育開発センター, pp.5-10 (2018a)
- 5) 尾崎司,「保育所現場との連携による実習評価ルーブリックの開発」,教育改革推進 (学長裁量) 経費予算成果報告書 (平成 29 年度),実践記録版 (2018b)
- 6) 尾崎司,「現場連携による実習評価ルーブリックの開発 (Ⅱ) ～ルーブリックを活用した事後学習の授業研究」,東京家政大学研究紀要,第 59 集(1), pp.13-21 (2019a)
- 7) 尾崎司,「保育実習ルーブリックの事例研究～中間評価の仕組みづくり」,教育改革推進 (学長裁量) 経費予算成果報告書 (平成 30 年度),東京家政大学・東京家政大学短期大学部 学修・教育開発センター, pp.5-11 (2019b)
- 8) 尾崎司,「保育実習で学生は何を学んだか (Ⅰ)」,東京家政大学教員養成推進室年報,第 8 号, pp.29-38 (2019c)
- 9) 尾崎司編著,「教育・保育実習のデザイン」,第 2 版,萌文書林 (2019d)
- 10) 尾崎司,「実習のためのアセスメント・システムの構築に向けて」,2019 年度私情協教育イノベーション大会発表用抄録 (公益財団法人私立大学情報教育協会), pp.222-223 (2019e)
- 11) 加藤孝士・富田喜代子・原田美代子・兼間和美・湯池由美・山本健志郎・奥村英樹,「ルーブリックによる実習評価と実習後の振り返りの関係ールーブリックの回答順に着目してー」,四国大学紀要, (A)49, pp.23-35 (2017)
- 12) 辰野千尋・石田恒良・北尾倫彦 監修,「教育評価事典」,図書文化社, pp.18,26 (2006)
- 13) 中嶋一恵・浦川末子・白石景一・下釜綾子・永野司・中村浩美・中島健一郎・滝川由香里・本村弥寿子,「ルーブリックを使用した学外実習評価基準の作成について」,長崎女子短期大学紀要第 38 号, pp.102-107 (2014)
- 14) 平澤一郎,「教育・保育実習指導におけるルーブリックの活用」,豊岡短期大学論集, No.14, pp.545-554 (2017)
- 15) 三木知子,「ルーブリックによる教育・保育実習自己評価スタンダードの提案」,神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,12(1), pp.1-10 (2018)